



調査・研究 報告

10月8日(土)～12月11日(日)

秋季テーマ展「地獄にホトケ～富士市周辺の観心十界図」より

富士市内に伝来する観心十界図

富士市立博物館学芸員 大高康正



観心十界図と呼ばれる宗教画をご存知だろうか。

「観心」とは、「自己の心を観察すること。」(『広辞苑』)といった意味をもった仏道修行の根本として使われてきた言葉である。

「十界」とは、人間の心の全ての境地を十種に分類したものである。四聖(仏・菩薩・縁覚・声聞)と、六道(天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄)の計十種の世界を総称したもので、こうした世界観を絵画にして表現したものが観心十界図である。観心十法界図、観心十方界図、観心十界曼荼羅などとも呼ばれるが、本稿では便宜上、観心十界図と統一しておきたい。

観心十界図は、画面中央に描かれる「心」の一字を中心にして、放射状に十界が描かれるが、こうした世界観を図示した宗教画としては熊野観心十界曼荼羅が有名である。富士市内に伝来する陽徳寺〔写真①〕・銀杏地蔵尊・延命地蔵尊の観心十界図も、こうした流れを汲んで生まれてきた作品と言い得るだ

ろう。

熊野観心十界曼荼羅が説くところの本質は、施餓鬼図にあるという指摘がある。画面の中央や上方に盂蘭盆会の施餓鬼供養の場面が描かれ、目連尊者による救母説話が2ヶ所抽出されている。ひとつは、地獄の大釜で鉾に串刺しにされた目連の母親・青提が描かれ、その傍らで涙をぬぐう目連の姿を描く場面があり、もうひとつは、釈迦如来の前で手をあわせる目連の図像が描かれ、目連は母を救済する手立てを釈迦に尋ねるという場面で、そこで釈迦が示した手立てが盂蘭盆会において施餓鬼供養を行うことであった。

つまり施餓鬼供養の場面とは、目連が盂蘭盆会と施餓鬼を行うことで自らの母を地獄から救済したという話であり、この物語の聞き手に対して、追善供養(死者の冥福を祈って行う仏事)の実施を促していることになる。しかし、陽徳寺・銀杏地蔵尊・延命地蔵尊の観心十界図は、画面中央に施餓鬼棚は描かれているが、熊野観心十界曼荼羅に登場する2ヶ所の目連救母説話は描かれていない。地獄の大釜に串刺しにされた女性が入れられようとする場面はあ



①観心十界図(陽徳寺伝来本)

るが、この図像も目連尊者が傍らに登場していない以上、彼の母親を前提として描かれたものではないだろう。但し、聞き手に女性を意識して描かれていたことはうかがえる。

「心」の字の真下、蓮池のたもとで施餓鬼棚へ向けて祈る女性の図像は、この観心十界図の主たる聞き手を象徴するものであろう。

賽^{さい}の河原の子供たちや、そこかしこに散りばめられた男女の「亡者」の図像は、現世に生きる自分や夫、子供を画面の「亡者」に投影させる他に、既に故人となっていた有縁の人物たちをも投影させていたはずである。そして聞き手は、逆^{ぎやく}修供養^{しゆ}（生前に死後に備えて仏事をしておくこと）の必要性を痛感するばかりでなく、故人に対する追善供養の必要性をも痛感することになったことであろう。

今回紹介する富士市内に伝来する事例は、施餓鬼供養を盂蘭盆会において実施せずに、地蔵縁日にあわせて行っている点に大きな特徴がある。そこには施餓鬼救済（蘇り）を地蔵菩薩のもっている救済特性とだぶらせてイメージしていた可能性は高いだろう。ここから観心十界図についても、地蔵縁日に掲げられるようになってきているのではないかと思われる。

【参考文献】小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』（岩田書院、2011年）

拙稿「観心十界図と地域信仰」（『山岳修験』47号、2011年）

【陽徳寺】（吉原1丁目）

市内吉原地区の陽徳寺は、山号を青陽山、本尊を地蔵菩薩とする臨済宗妙心寺派の寺院で、身代わり地蔵として今も地域の信仰を集めている。この地蔵はもと青野村（沼津市青野）の光明庵に安置されていたが、大洪水で流され、浮島沼から吉原宿（元吉原）へ漂着した後に陽徳寺にまつられたという伝承をもっている。

陽徳寺も江戸時代初期の吉原宿の2度の所替に伴って移動してきたと考えられるが、開山や創建については不明である。江戸時代後期の地誌『駿河志料』によると「臨済宗、今泉法雲寺末、青陽山と号す、除地五畝十六歩」とある。境内には、本堂、鐘楼堂、閻魔堂（鎮守堂）の他、六地蔵や寛政5年（1793）の積善供養塔や浄土宗捨世派の徳本行者に関わる文政6年（1823）の「南無阿弥陀仏」名号塔といった石造物が残る。現在の本堂は明治29年（1896）再建である。

さて、この陽徳寺に伝来する観心十界図は三幅の掛幅画で、毎年7月23・24日の例祭日に、本堂西側に仮小屋をたてて掲げられている〔写真④〕。例祭日は本尊地蔵菩薩の縁日に行われるものであるが、この両日は本堂前に参詣順序を記した看板が掲げられ、閻魔堂には閻魔王像や奪衣婆像も置かれ、水塔婆を供える施餓鬼棚も組まれている。



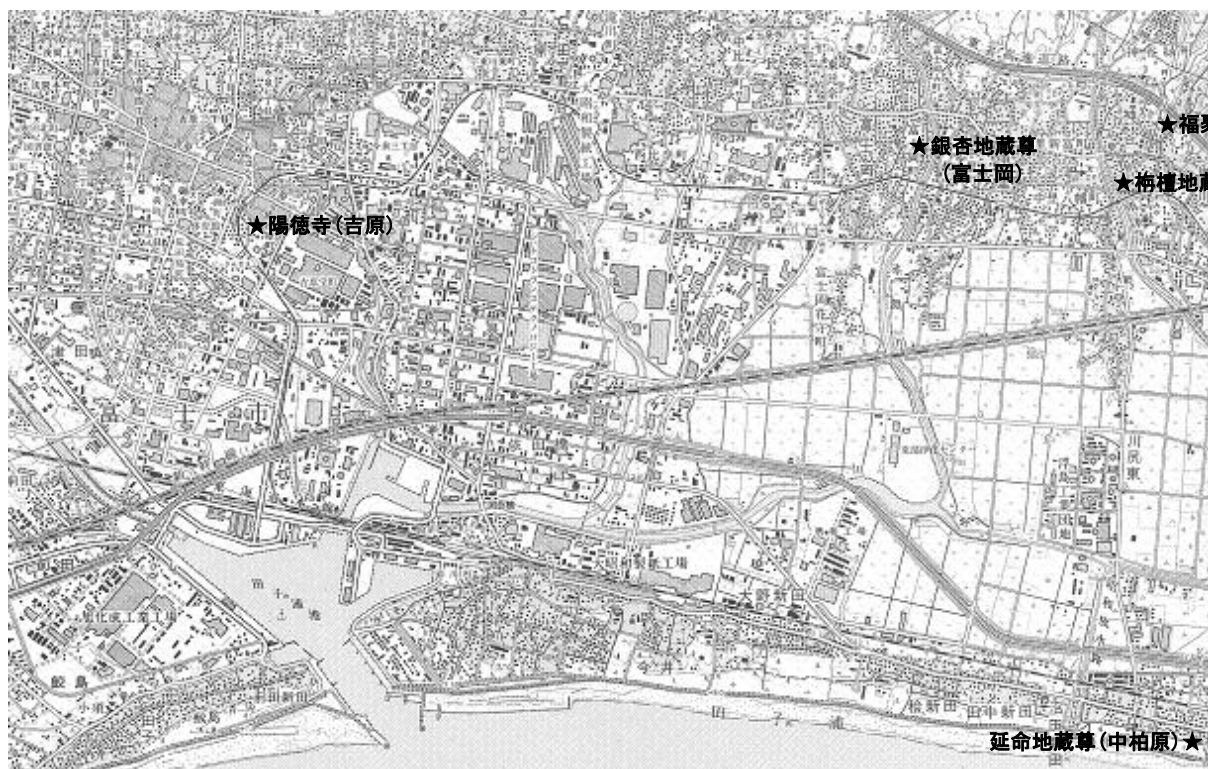
②円頓観心十法界図(梅檀地蔵尊)



③円頓観心十法界図(福聚院)



例祭日に掲げられる観心十界図
 (上：④陽徳寺、下：⑤銀杏地蔵尊)



〔図〕富士市内に伝来する観心十界図

国土地理院発行数値地図25000分の1地形図（平成15年発行：吉原）を使用

【銀杏地藏尊】（富士岡）

市内富士岡地区の銀杏地藏尊は赤湊川の右岸、江戸時代の花守村に含まれる場所にあり、地藏尊をまつる堂宇のすぐ背後には、樹齢六百年以上とされる静岡県指定天然記念物の大銀杏がそびえる。

この銀杏には、乳が出ない母親が願をかけるとたちまちに乳が出るようになるという「子育て大銀杏」の信仰があり、本来「子安地藏」としてまつられていたものではないだろうか。この地藏尊も毎年7月23日に地区の特定の組により例祭が行われており、その際に観心十界図を掲げる〔写真⑤〕。例祭日は、当年の当番組が汲んだ海水を桶に入れ、本堂にて参拝者に対して追善供養を行っている。参拝者は先祖代々や故人の命日の記した木札（板塔婆）を選択し、篠枝で海水をかけて供養する。ここから、銀杏地藏尊の例祭も施餓鬼供養に関連して行われているものと理解できる。

【延命地藏尊】（中柏原）

市内中柏原地区の延命地藏尊は、JR東海道線東田子の浦駅に程近い、江戸時代の中柏原新田村に含まれる場所にある。江戸時代の地誌『駿河記』に「浮島山延命寺 洞家 駿東郡助兵衛新田大道寺末」とあり、かつては曹洞宗寺院であったようだが、さらに後年の地誌『駿河志料』では「延命寺、京都黒谷光明寺末」とあって、浄土宗に転宗していたことを確認できる。延命寺では毎年7月23日に中柏原地区の各組が交代で例祭を行っている他、毎月23日にも地区の女性が地藏堂に集まって地藏講を行っている。➤

例祭日は現在、7月23日の直前の日曜日になっているが、例祭日のみ観心十界図が本堂内に掲げられる。

【梅檀地藏尊】（神谷）

市内神谷地区の梅檀地藏尊は、岳南鉄道神谷駅から程近い神谷1丁目にある。現在は伐採されているが、かつて地藏堂の背後に梅檀の大きな樹木があり、それが名称のもとになっている。また身代わり地藏とも呼ばれている。地藏尊本堂の北側に旧根方街道が通っており、堂宇の周囲には馬頭観音の石造物が3基残る。

梅檀地藏尊では毎年7月23日に神谷1丁目の各組が交代で例祭を行っている他、毎月23日にも地区の女性が本堂に集まって地藏講が行われている。毎年例祭日に限って、本堂の入口に観心十界図（円頓観心十法界図）が掲げられている〔写真②〕。

【福聚院】（増川）

市内増川1丁目の福聚院は、曹洞宗の寺院で山号を圓通山、本尊は準堤観音で、市内原田の永明寺末寺となる。駿河一國観音霊場の第29番、伊豆・駿河両国観音霊場の第17番札所に位置づけられている。

元禄12年（1699）3月に永明寺住持の覚養長円和尚が荒廃していた堂宇を再建し曹洞宗に改宗したとされ、その後、文政10年（1827）に火災にあって堂宇を焼失するが、慶応元年（1865）第24世の越童和尚の代に再建を果たす。この福聚院に伝来する観心十界図（円頓観心十法界図）は、普段は本堂内の本尊外陣の向かって右側に掲げられている〔写真③〕。現在、特定の法会や行事で使用はされていない。